

# 真 生

第六卷 第一號



◎ 来る歳も来る歳も望みある人の心にはいつも新生の氣分である。それと同じく。永遠の理想に合掌せる真人の生活には一切がいつも望みに輝いてゐる。

◎ 如何なる苦痛も困難も、ミオヤに南無する真人の生活には一切が喜びとなり。力となる。而て如何なる怒りも悲しみも、念佛の生活は光りと變る。

◎ 世には身を殺して仁を爲すと云ふ諺もあるが、其の實真人の生活にはそれが無い否其のまゝが自を生かす方法である。金も有効に費ふのを生かすと云ふ、此の身を仁の爲めに費ふのが何で殺すと云はれやう。

◎ されば此の身を殺すと云ふことはそのまゝ此の身を生かすことである。従て真人の生活には犠牲がない。一切が皆喜びと望みと力の生活である。活動の源泉もそこからあふれ、人格の輝もそこから流れる。

◎ 世には人格ある行爲もなく、自ら人格者たらうとする人がある。乍然それは愚な考へではないか。人格者とは人格ある行爲者その人のことであるものを。行爲なき所に何の人格があり得やう。

◎ されば友よ、真に自らを愛するものは先づ自らを生かさねばならぬ。而て真に自らを生かさぬものは先づ眞生の光に生かさよ、眞生の光とは即ち神の生活であり、佛の生活である。(念)



# 初水供養

## 目次

◆ 初水供養	冠子
◆ 獅子と羊の群	土屋 觀道
◆ 新年雜感	中村 辨康
◆ 本心の叫び	土屋 觀道
◆ 吾朋便り	
◆ 傳道日割	
◆ 案内	

● 聖上の御不例、御經過の御大切なる様子、頻々として傳へられて來ます、今に今月が來るといふのに正月らしく思へませぬ、本當に今年の正月は火の消えたやうな正月であります。

● 上御一人の御不幸は下萬民の不幸であります、御一人の御姿が消えるといふことは萬民の心の中に燈の消えるといふこととであります。陛下のみ心が我々の心の中に映て居り、我々の心が亦陛下の御心の中に映てゐます。

● 本當に君臣が一心同体であり、親子、佛凡が一体であります。一体であればこそ、心から相嘆き相歡ばすには居られませぬ。御義理の忠義、御義理の孝行、御義理の信仰なんといふものは出來るものではありません。

● 眞實に信じ合ふといふのは此一體といふ實感からであります。佛にへつらふものでもなく、又佛を勝手な時だけ擔ぎ出して來て、祭り上げるものでもなく、佛に仕へるといふことは眞實「自己」に仕へるといふことであり、自己の神性、自己の自性を發揮することとあります。本當に自分を價値あるものにしたいたのであればこそ、如來に絶えずに居れぬのであります。

● 本當に如來さまを拜めば拜むほど、自分を無駄にしてはならぬと氣付けられます。佛を拜む心は直ちに自己を拜かむ心であり、そして社會、法界を觀る眼となつて來ます。本當に「信ずる者」こそ「強き者」であり、「強き者」こそ「働く者」であります。(冠)

● 私は毎朝起きて井戸端へ出ると、先づ一杯の水を汲んで恭しく法界一切の衆生へ献じます、それから其残りの水を洗面器へザアとあけて顔を洗ひ、次々の仕事にかゝります。

● こんな子供氣な水供養だが、これが私の働く力の出る根源であります。僅か一杯の水位いこちらで捧げるつもりでも、先方へ届くかどうかかわからぬぢやないかと云ふ人もあるが、私にはハツさりこれが布施供養になつてゐることを感じます。

● 一杯の水とは謂へ地獄の衆生の焰の中へ注ぐ法雨ともなつて居り、餓鬼の人々の咽喉の渴きを潤ほす甘露ともなつて居ります、又如來さまのみ前へも清涼の水となつて運ばれて居り、私の亡くした子供の處へも廻向されて行て居ります、總ての人々、總ての衆生は此一杯の水によつて今甦つてゐます。

● 實に一杯の水で全法界を潤してゐる。今私の心が水となつて全法界に漲てゐます。私の身軀が水となつて如來さまのみ元へも、畜生、餓鬼の世界へも行て居ります。

● 一杯の水を献ずるといふことは「我身と心との總てを捧げる」といふことであります。であるから此の朝の行事をすますと一時に勇氣百倍して、疾風迅雷的に大活動に移ることが出來ます。

● 私の右往左來、一々が皆此の水供養であります。私の一生も一杯の水、私の永生古今を貫いて悉くが此の初水供養の外に出でませぬ。本當に私は此の微衷此の瘦身を此の大法界に貢獻し得ることを心から感謝して居ります。(冠子)

# 獅子の子と羊の群

土 屋 觀 道

佛典の中に或る獅子の子が崖から落ちて羊の群の中に入った。羊の群は之を育み養つて下れたが、獅子の子は其の中で段々と生長した。然に其の長ずるに従て彼は其の體格と云ひ、其の容貌と云ひ、其の氣持となく羊の群と自ら異なることに氣付いて來て、それが何となく氣がかりになつた。又その爲め何となく羊の群と遊ぶのもいやになつて來て、時々其の中に居ることも好まずして、羊の群を離れては遠く獨りで遊ぶことさへもあつた。乍然それは自己の本心が羊の群と一致する心になれないからであつたのである。然に或る日のこと突然一疋の親獅子が或る岩角の崖の處に現はれて、明月を眺んで吼えた。その聲は實に勇ましい強猛の聲であつた。そこに居つた多くの羊は皆其の聲によるいぢの、いて、全く地にひれ伏して悉くちぢみ上つて終つた。然に同じく、其の群の中に居つて此の獅子を聞いた獅子の子は驚くどころか、反つて其の聲によつて、自己本心の叫びを感じて、思はず自分も獅子吼して、我を忘れて親もとへとかけよつた。彼はそれからと云ふものは永久に羊の群に歸ることなく、親獅子の群に入つて、親獅子と共に獅子としての生活を悠々と送つたと云ふ話がある。

今、私は此の話を思い出して、ひたすらに、如來と自分との間を思ふ。そして、そこにはしきりに如來がなづかしく亦如來が戀しく、そして又、自己の佛性を自覺し得たことを心から喜ばずには居られないものがある。されば友よ、私達は今此の佛説を聞いて、何事かを思ひ出すべきであらう。

## 二、

それは云ふまでもなく吾人は單なる動物にあらずして、即ち佛の子であると云ふ自覺である。この獅子の子が崖から落ちて、羊の群に入ったと云ふことは即ち私たちが自己の佛性をもち乍ら、同じく動物の中間に落ちてゐることを意味してゐる。而も獅子の子が羊の群に居り乍ら、自分の生長するに従つて、其の體格や容貌が羊と異り、そのまた氣分までも異つて來るのを感じて、何となくそれらの群と共なることを欲しくなつたと云ふことは、正しく私たちが單なる人として、動物のやうな衣食の生活や、それらばかりの生活思想にあきたらなくなつて來たことを語るものである。而も獅子の子が時々羊の群を離れて獨り遠くに遊び、羊の群と相和せないと云ふことは、即ち私達が彼等動物の生活にあきたらずして、獨り迷想に眠つて人生の眞意義を反省しつゝ佛の世界を求めつゝあることを語るものである。その時、突然一疋の親獅子が岩角に立つて現はれたと云ふことは即ち釋尊が突然正覺を成じて此の人間界に出現したことを示すものである。獅子と云ふのは釋尊を示す、即ち獸類の王として輝く獅子の如く人類の王たる釋尊の王位を示す言葉である。言換へれば釋尊の人格が一切に超えてゐることを意味したものである。その岩角に現はれて獅子吼したと云ふことは釋尊が本心から、人類の自覺を叫ばれたことを意味し此の獅子吼を聞いて羊の群がふるいぢの、いて悉く地にひれふすと云ふことは釋尊の叫びの崇嚴なるに一切の外道を聞かぬいぢの、くのを示したもので、而て此の獅子吼を聞いた獅子の子がその聲を聞いて驚くどころか反つて自己本心の全力を感じたと云ふことは即ち私共が釋尊の叫びを聞いて、其の叫びに共鳴し、吾人の本心からの叫びを自らに感ずることを意味したものである。獅子の子が親獅子のもとに飛んで行つて永く羊の群に歸らず、永久に深山に入つて獅子の群と悠々と暮したと云ふことは、私共が釋尊の教へに従て自己の佛性を發見し、自ら佛陀のみもとに走つて永く人間の世界に歸らず、悠々として佛界に其の生活を送るべしと云ふことを深く闡示したものである。

然ば友よ、私達は此の話を聞いて、果して自分が單なる人間の子ではなくして、佛の子であると云ふことを、心から知り得たであらうか。此の獅子の子と羊の群とは單なる一つの話ではない。即ち之は私共自身の現實と理想とに於て、釋尊の理想の聲が私共の理想の聲と一致したことを示したものである。従つて、そこには實に釋尊解脱の本心の叫びが釋尊自身の全心の叫びとなつて現はれてゐるのであつて私共が此の話を聞くと云ふことはたゞ單にこの話を聞くと云ふことでなく、此の話の中に含まれてゐる釋尊の本心を聞かねばならぬ。而てその釋尊の本心を聞くと云ふことは釋尊と等しき私共の自覺を私共自身の中に本當に聞くことである。言換へれば釋尊の叫びによつて、私共自身がそのまゝ佛子であること自覺すべきである。否それどころか、寧ろ自己さへ忘れて釋尊の叫びに共鳴し、身自らが自己の本心の叫びとなつて、釋尊のみもとに走り、佛の子として佛の生活を自らに致すと云ふことが即ち此の釋尊の獅吼を聞くものといはねばならぬ。思ひ一度こゝに至つて、靜に此の説話を私共自身の上に反省し來るとき、私共は今更のやうに釋尊の説法が私共の爲めの獅吼となつて、一層明確にせられて來るのを覺ゆる。而て獅子の子とは誰れあらう、私共自身である。其の聲を聞くとはいち佛の聲を聞き佛子の叫びを自らに聞くのである。

然に友よ、私達は今までの釋尊の獅吼を何と聞いてゐるのであらう。果して吾人は釋尊の叫びが自分の佛性として聞えてゐるであらうか。ともすれば私共の耳には釋尊の獅吼と云ふことをたゞ猛獸が月に吼えるやうな勇しい勢いで、釋尊が自分の自覺を叫ばれるの位位に、聞いて、此の釋尊の叫びに共鳴を感じた獅子の子の叫びを自分の上に聞かなかつたではないか。即ちその獅子の子が羊の群から離れて自分の親もとに歸るやうに、私達は果して如來のみもとに歸つたであらうか。私達は今やこの獅子の子と羊の群との話によつて、其の釋尊の叫びに目ざめねばならぬ時が來た。

## 四

それに就て、私達はいつの時代からか知らないが、とにかく永い間動物の中間に入つて居つた。そして羊のやうな生活を羊のやうな動物の群の中でやつて來たのが我等である。然し又いつからとはなく私達人類は普通の動物とは自ら形も異なり、氣分も容貌も異つて、單なる動物の生活も好まなくなつて來たことも事實である。そして私共の間に人間としての單なる五十年や百年の人生にもあきたらず、人間以上の神の生活や、佛の生活を何となく求むる氣分にもなつて來た。言ひ換へればそこには永遠の生命を求め、限りなき向上の一路をたどり度々念願して止まないものが自分の心の奥底にもさざして來たことは事實である。されば友よ、今や吾人は正に釋尊のに接して、獅吼自己の本心を聞くべきの時が來たではないか。釋尊の覺り、釋尊の叫びこそは眞に私共の本心の叫びである。而て、其の釋尊の叫びこそは始めて私共の眞の叫びを明に自覺せしむる叫びである。而て此のとき私共は始めて、眞の自己を知り、眞の我に歸つて、永劫不死の生活に自らを生かすことができるのである。

それにつけても未だこの聲を聞かない人々があるならば私達は全力を獻げて此の聲を聞けよと叫ばざるを得ないものがある。凡そ人とし人と生れ來て、永久に羊の生活で一生を終ると云ふことは決してその人として眞の願ひではないはずである。然ば本心の願ひでとして、眞實の生活として、佛子の自覺の私達が立つことはそれこそ、人とし人としての眞の喜びであらねばならぬ。

されば友よ、私達は先づ何を差し置いてもこの釋尊の本心を聞かねばならぬ。そして、一刻も早く此の叫びによつて、自己本心の佛性を自覺すべきである。(一五、一二、一七)

中 村 辨 康

年改まれども人改らず。年々歳々新らしき年を迎ふる毎に我姿の腑甲斐無さが層一層痛切に思はれて悔ゆる斗りである。初日出の麗らかさ松の葉の清らかさを見るにつけ自然は念々刻々常に撓まらず清きに進んで行くに拘らず己れ計りは何故にか未熟の醜さをのみ續けて居るのであらうか。

人間が凡て有るが儘に唯だ素直に一切を受入れつゝ感謝と法悦とに生き行くならば其處に無爲泥洹の世界が展開せらるゝでもあらうけれども、盲目的に自我觀念を根深く持つて居る私達としては唯だ夫れ丈では満足し兼ねる様な氣がする。

どうか不遜な言葉をお許し下さい。而して思ふ儘なる氣持を赤裸々に云はして下さい。

私はこんな事を思ひ續けて居る。

私達は誰れでも人夫々の生み付けられたる獨自

の天分、言ひ換へれば誰人も眞似する事の出来ない特異性を持つて居るので、よし夫れが無明とか業とか云ふ者に依つて生起された者であるにしろとにかくさうした者にされて居る事は是認しなればならない。此故に何時も自我の特異性に立脚せる生活なり理想なりが事實にも精神にも顯はれて來るのであるから聖者でない限り局限されたる無我の無爲自然と云つた様な氣持にはなり得られぬのではなからうか。

私達は具煩惱者の故でもあらうが常に次の様な事を欲して居る。即ち

一切に融合ふと共に其中から何時も先覺の地位に一步踏み出てつづ自分の全體を一切に布施して行きたい。而して其一切に布施されたる自分の全體が自分に關係せる直接間接の所有る世界に有効に働き掛けて行く姿を眺めたい。と

若し是が本書に實現されたら其時始めて本當の喜び本當の元氣が出て來はしないかと思ふ。

精神的な布施行。是に或る程度迄誰人も行ひつゝある事であり且つ割合容易に無所得な考へを以て進む事が出来るが、物質的布施行。一切に投げ出し得る無我無所有の姿になり得られない事は誠に残念な事である。全く價値批判なしに乞はるゝ儘に欲せらるゝ儘に我が所有を無にする事が出来得たいものだと思はれてならない。

然し私に物質的所有があるだらうか。家族を養ひ自身を養ひ得る丈はどうかこうか恵まれては居る。預り物とは云へ廣く建物もある。温き衣もある。肥やしむる食もある。之をもつと切りつめて行けば剩餘もあり得るだらうと思ふ。此意外に於てブルジョアの類だとも云へるが貯蓄心の無い私、恒産なき我家の内幕を眺め來る時は自ら顧みて「我も亦たプロレタリアの一員たり」と苦笑しなければならぬ。状態である。

此處に私の痛切なる反省をば繰返へされて來る。噫々。私の生活は誤まつて居る。私は家族を

持つ可き人間ではなかつたのだ。イヤ今更らそんな愚痴を言つたとして初まらない。私はどうしても私の生活を整理し私の態度を革正して、物心二面に亘つて本當に清く本當に尊く本當に晴れ渡つた汚れなき生活をしなければならぬ。

私が本當に道を求めやうと志してから七個年の長き年月は過ぎ去つた。此間二千五百餘日其處に何を爲したであらうか。靜かに反省し來る時何もなして居ない。一切からは恵まれ生かされては居るが自分として何等社會に對して真施しては居ない。信仰に入つたと稱し乍ら何等清まる處なくして唯だ醜き行ひのみを爲して來た。一旦汚れたる自分を捨て去つて天地と共なる自分、天地と同じ廣さなる自分我が父なる如來ご一つなる自分を發見したのに拘らず、何時の間にか知らず／＼に従來の汚れたる小さき我に立ち戻つて仕舞つた。一切をら事たわ事誠ある事なき私。念佛のみぞ誠にしておはしましけりと云ふ其念佛さへそら事たわ事にならうとして居る。恨めしき私。淺間しき私何と云ふ腑甲斐なさであらう。金錢に左右せらるゝ

私。名譽の奴隷なる私。褒めらるれば喜ぶ私。貶らるれば悲くなる私。全く毀譽褒貶の風のまにまに動搖せられつゝある私。或る時は高ぶり或時は沈み或る時は屈從し或時は反抗し或る時は友を戀い或時は友を悪くむ恒心なく覺悟なき私。數へ來れば一つとして醜くからざるなき私。何處に満足が有り得やう。何處に喜びがあり得やう。

噫々何の信仰ぞや何の求道ぞや。之でも相當に自惚れのある處が滑稽至極で、本當になさけない事だと思ふ。

それでも唯だ一つ丈は收獲があつた様に思ふ。夫れは時々反省し得る事だ。反省の結果デツと忍び得る事だ。黙まつて祈り得る事だ。

オ、我父如來よと祈る時のみ少しは落付ける。夫れ丈だ。夫れ丈だ。情けない哉夫れ丈だ。

私はどうしても私の生活態度を反省しなければならぬ。私の物質生活を整理しなければならぬ。私は私に覺醒を促がして居乍ら未だ覺醒し得ざる此態度を革正す可き時が來た様に思ふ。

こんな話がある。或る聖者は初め三十磅の收入を持つて居た。其内貳拾八磅で生活しあとの二磅を社會に布施して居た。其後六拾磅になつた時彼は三十二磅を布施し九十磅になつた時六十二磅を布施し百二十磅になつた時九十二磅を布施した。物價が高くなつたのに御困りでせうと云ふ人があると、段々貧乏に馴れて來たと云つて決して他を言はなかつたと云ふ事である。

此態度だ。私達は此態度でなくてはならぬ。否な私達は此態度でなければならぬ。十方檀物に依つて生かされ行く私としてはかくあつてこそ本當のものになり得るのではなからうか。

然るに私は色々な事情に牽制されつゝ、複雑な生活をなし繁鎖な行爲をなし行く此誤まれる態度は全く恥づ可き限りである。

私は縁起を信ずる。如何なる現象と雖も縁起の理に依らざるものなき事を信ずる。我々の一舉手一投足皆な縁起されたるものであり全縁の總勘定であつて偶然偶發のものではない事を信ずる。随つて其處には一點の無理なく其處には一點の無條理もない事は明白なる事實であつて、宇宙を包攝する全縁統括の力は絶對的正義其物である。何を恨み何を喜ぶ可き。唯だ己れの拙さ己れが淺薄さを悔ゆるのみである。

此故に私をよからしめんとする祈りも、其實私をしてよき私たらしめんと自ら努力せしむる様にとの精神的訓練的動作に外ならないのであつて、決して無理によき結果のみを得んとして居る卑屈な功利心からではない。換言すれば耳四郎の心理をして非耳四郎たらしめんとの計畫なのである。

覺醒す可くして覺醒し得ない私をして正しき本然の姿に立歸らさなければならぬと共に、其本然の姿に立歸へる可く先づ私の物質生活を改め行く事は最も緊要なるものではあるまいか。

生きんとして本當に生き得ず死せんとして本當に死に得ず立たんとして本當に立ち得ず覺醒せんとして本當に覺醒し得ざる此の愚かなる私に本當の喜び本當の満足が到來しない事は寧ろ當然であつて唯だ痛ましく泣く斗りである。

泣け！。泣け！。センチメンタリズムでもよい。メランコリーでもよい。泣け！。泣け！泣いて泣いて泣き抜け！。而して靜かに我を聞いて行け！。

噫々。年改まれども人改らず。我のみは何故にかく改まり得ないのであらう？。

私の父なる如來よ。どうか私をして一日も早く清き全きものたらしめ給へ！。

御心のまゝに此地にもならせ給へ！

# 本心の叫び

土屋 觀道

## 一、本心の叫び

本心の叫びとは何であるか、それは自分自心の心から、真に叫びたい根本の要求である。それについて私たちの本心の叫びは何であらうか、世間の多くの人々は此の要求を持ちながら、未だその要求が何であるかを知らぬ人が多いのである。乍然今日の私たちが真に喜べないのは何故であるかと云ふに要するに此の真に喜ぶべきもの、言換れば未だ自ら真に喜び得べきものに觸れることができないからである。乍然私共の生活に於て誰か本心の叫びを求めないものがありませう。それについてはどうしても私共の本心は心から満足のできる生活言かへれば全身の努力を以つても尙なざるを得ざるもの、恰もそれは百獸の畏たる獅の吼えるやうな全心の叫びに自らを生かしめたいと云ふものがある。さうして其の叫びが私たちにいつくるであらう。若し私たちがその本心の叫びを真に叫ぼうとするならば、吾人はそこに何が自らに叫ぶに價する本心の要求であるか、反省しなければならぬ。何故なれば、私達の本心は自ら求むる本心の要求に一致するものに自ら觸れない限り、決して自ら其

の要求を充たすものでないからである。然に世間の人々は多くの場合未だこのことに思い至らずして、本心の叫びをのみ待つのであるがそれは決して真に當を得たこととは云ふべきでない。然らば本心の叫びとは何であらうか。

## 二、肉慾と財慾

世には朝から晩まで肉慾と財慾とに捕はれ、或は名譽と權勢とに身をあてられる人がある。乍然之を以つて果して私たちは眞に自己の本心を満足することができ得るであらうか。靜に人生の一生を考察すればもとより、人には肉慾も財慾も必要ではある。そしてまた、或る意味に於ては名譽も權勢もいらぬと云ふものではない。乍然たゞそれだけ以つて私共の本心が満足し得ると思ふならばそれを吾人は大なる誤りであると云はねばならぬ。此の點について私はいつも之等の要求が何を中心として必要であるか、それには肉慾と財慾との價値の範圍と云ふものを知らねばならぬ。然乍ら、その、肉慾が必要とするも、肉慾の價値的範圍はどこにあらうか。之を見るに或は生理的に見る見方もあらう、そして又之を見るに道德的に見る見方もあらう。乍然私は之等の二を捨て、直に自己の本心に訴へて其の問題を考へて見たいと思ふ。而て、それが或は生理的説明ともなり又道德的考察ともなるのであつて、要は自づから此の自己の

# ◇吾人友便り

●東京 土屋觀道より、

愈々正月になりました、道友の諸兄姉妹たちには御變りもありませんか。今年はこの外悲しいやうですが御障りもないことかご御案じ申して居ります。乍然お互が少しづつ、入道にいそしんで行けることぶふことは人とし生ける身の此の上もない仕合と喜ばずにはおられません。殊に近來、各地に於て、私共の再生の意義を解し、とくに、慈光中心の再生同盟が發起され、つゝあることは實に此上もない、喜びの極みであります。私ももう歳、四十を越えまして四十一才となりました。四十にして、惑はずと云ふ孔子の教へもありますが、私の心も愈々確然として動かぬもの、あることを自らに感じて止まぬものがあります。願くは之を期會として更に今年こそ皆懐と共に進まして貰ひ度う存じます。尙私の一家でも皆喜びの中に日夜慈光のもとに働いてゐますから他事御安神のほどを御願ひ申します。

●岡山縣中學 小坂岩次郎様より、  
道友諸兄よ。

土屋先生は二十一歳の御若年に最早迷の夢からお覺めになられたとか拜承いたします、又世人幾多の方々には既に信仰生活に遣入られて居られますとか誠に羨望にたへません、信仰生活を聞く度に、ナセ私丈は此年になるまでにもつと眞實な生活に入らなかつたのだらうか、又現在も車前の大理か把束した生活が出来ぬのだから、思へば思へ程考へれば考へる程此身の罪深いことが感ぜらるゝなりませぬ。或時は世人の信仰生活なんてほんとか知らんと自問し、いやそりや眞の我に魅つたなら必ずや自他超越の光明界があるに違ひない、も自答します。之を繰返すこと幾度か知れませぬ、兎も角斯かる心境がある以上惑の生活者だと云ふことは事實です。一體どうしたちよいのでせうと人々に生活様式を展廻したら私の衷心の要求が満足されるのでせうか、而に救済して下さる方もな明暮願つてゐる一人であります、一々お名を存じませぬ故紙でお願ひ申上げます。どうか皆さまの御體験を忠實に御示し御教導下さい伏て御願ひ申上げます。

●新潟柏崎 渡邊八右衛門様より、

先般の御手紙差上し如く吾地も漸く惠まれた憐れが致してほんとに嬉しいやら勿體ないやら何と申して見やうありません。これによりまして私ども各々の責任が非常に重く成りましたと同時に自己の至らざるを痛切に感じます。只一心に念佛する外ありません。御上人さまの來る二月に御用を願ふ事を道友一同御待ち申して居ります何卒二月十日よ廿日迄の間を柏崎へ御分け被下やう是非御願ひ申上げます。



生活に於ける根本本心の満足を中心として一切が起つて來ると云はねばならぬ。

然ば肉慾の價值的範圍とは何であるかと云ふにそれは自分が本心から満足のできる爲めの自由の生活である。云はば肉慾の爲めの人生でなくして人生の爲めの肉慾と云ふことである。更に言換へれば肉慾の爲めの私でなくして、私の爲めの肉慾でありたいことである。佛教がともすれば此の肉身を輕視して、自己の本心の要求を充たさうとするとも要するに世間の肉慾に捕はれてゐることを反省せしめて、自己永遠の完成に自らを生かしめやうとするところにあるので、肉慾と云ふものが一概に悪いと云ふものではない。否、若し其の肉慾なるものが私共の生存上必要であり、又それによつて、私共が眞に理想を實現することに深く効驗するものとなるならば、それは決して私共に於ても排斥すべきものではない。否寧ろ私共は之を重要し、之を尊重すべきことはもとよりである。乍然私共はそれが何の爲めの肉慾であるかを知らねばならぬ。財慾に於ても亦然りである。名譽と權勢に於ても亦然りである。

三、ものゝ價值

このことについて私はいつも心から考へざるを得ざるものがある。それはすべて何ことも價値の範圍についてである。肉慾

は自己の生命を保存し、又自己の種族を保存する爲めである。然に吾人が肉慾の爲めにかへつて自己の生命を毀損し、自己の種族の發展を妨げるものならば已に肉慾の價值的範圍を越ゆる罪惡と云はねばならぬ。而て又その自己の生存並に種族の存續は一體何を意味するものであらうか、たゞ單に若し私たちが生存し、又單に私たちが種族を保存するものとするならば、そこには普通の動物と何等違なる所はないのであつて、前述の獅と羊とに於て何等違なる所がないのと同様である。然に私共は恰もそこに獅の子が自ら羊の群に居ることを好まずして、獅の群をあこがれたやうに、亦自ら動物的生活に満足することができずして更に一步の向上の生活に自らを生したい要求がある。それが即ち生き淮いある價値の生活を要求する所以である。而て其の生涯なる生活とは何であらうか。それはわたくし共がをして、眞に價値ある生活に自らを意義あらしめやうとのことである。言換れば肉慾の要求を満たすことは決して悪いことでない、乍然吾人は此の要求を充すことによつて、如何なる場合にも之によつて、自己の生存を短かめ、或は種族の發展を妨げるやうのことがあつてはいけない。否徒にそればかりでなく、寧ろ之によつて、自己の健康を保ち、自己の生命を永からしめ、更に此の身と心とを以つて自分の欲する宇宙の眞善美をこそ此

私どもも先日お歸りの後から毎月一日十一日十七日廿一日の夜、光寺に於て念佛及感想やら座談會を續けて居ります。又道玄箕輪嘉一君は眞光寺の里のみにあきたらず批把、村の木、棟上人の遺作を安置奉る十玉堂、始めて先月より集り奉催されまして中々青年男女の歸依者が御出來になり盛んであります。

皆我々道友は如來の御慈悲をほんとに頂き自己を反省して且信即により幾なり其活社會に營業者は營業に育家は育育に一歩づつ、體現されるかか驚歎マナに居られませぬ。一月清水の御別時には若下祥兒君及外一二の御方が來加致したいと申して居られます。

●美濃 順町 安甲順順様より、世の中はみな悉くみだなれば逃げもかくれもみだの日のまへ少しく法の道を聞くと生死輪廻の虚偽的精神が儼びになり何んとかして其道が脱々んす然れども逃ぐるゝ逃げらゝ又過去の墮性は盛に念佛の中に逃れ念佛の人となる。乍然念佛になれぬ時我他彼此の目開生死輪廻する。

●大阪 神谷學周様より、新春は嬉し此の天地に念佛の聲はがらかに聞こゆるはまたなくうれしい我も人も此の如來の慈光裡に力強く生きゆく相しながら樂土に經行するに似たり淋しき我も念佛にはげまされ信友の導けるあり人々悉く我が師佛々みな我が友嗚呼新天地に生くる嬉れし。

此の命無量の壽命と信じけり

●岐阜市 漆町 松浦重三様より 量りなき 佛のみ名を たゞては

まづ 新玉の 年をことぶく

ともかくもあなたまかせのくれい茶

將來ともに幾久しく念佛の道友となりまた

導師として御導きとおかりをたまはりたし

●越後 渡邊三十郎様より、

越後の里へは最早雪が降りて來りました、お上人には相變らず一寸のお暇も無く、お導道のお事と存じます。當地眞生會にては、關町に支部が出來まして、みなさまが益々熱心に念佛を勵んで居られます。

●金澤市 氏川俊徳様より、

限りなき如來の慈光は、鉢に道を求め唱へる者々のお導し下さい、慈懷に抱かれて瀾瀾矛盾せる日々の中にもかすか乍ら眞生の道を一歩踏みしめて進みゆく人々は幸福だと存じます、希くは先生のお教導により、道を迎へる人々の驛馬に付して出來るだけ眞實に近い道を歩かせて戴きたいと日夜念願努力してゐます。(釋然房合十敬白)

●島根縣 同人より

拜啓益々ご健勝にて斯道の爲め夜に目を繼ぐ御奮闘眞に敬賀し奉ります。私の村は現在約五百戸餘の小さい農村、すがそれでも文化の潮は斯うした片田舎にも駿々として押し寄せて來ます。この過渡期にあつて中堅たるべき青年の思



士に實現せしむるところのものであらねばならぬ。従て財の慾  
求も亦然りである。そこには經濟の價值的範圍を考察して、宜  
く經濟のなくてはならぬ重要なものなるを知ると共に、そこ  
は其の經濟の範圍が人類の生存を助け、社會の文化を向上せし  
むるもの、上に於てのみ其の經濟の尊さがあることを深く反省  
すべきである。

#### 四、人生の價値

然ば人生の價値とは何であらうか、わたくし共は先づ此の問  
題からして眞に解決せなければ本心の満足を得べきでない。而  
て本心の満足とは吾人が宇宙生命の現はれであり、宇宙理想の  
實現者として、自己の理想に、自己自身を顯現することが即ち  
それである。換言すれば自分自身の本分に氣付いたとき初めて  
自己生存の意義を知り、そこに始めて無始より以來の根柢の關  
が破れて、永劫に輝く宇宙の理想が自分の上に照り渡るのを見  
るのである。このとき吾人は永生の光を得、不死の自覺に入つ  
て、神の生活を自己自身の上に實現するに至るのである。之を  
佛子の自覺と云ふ、本心の叫びはこゝからである。そこに献身  
の自覺があり、そこに本心の叫びがある。働かずには居られな  
い。又語らずには居れない。所謂献身の自覺が自ら輝いて來る  
のである。(二五、二二、一四)

## 清水眞生修養會趣意書

中 村 辨 康

人生をして眞實ならしめ生甲斐あらしむる時、本當に元氣に夫々の職務にいそしみ且つ愉快に各自の健  
康も保たれつゝ正しい積極的生活が營まれ得る事は申上げる迄もない事であります。

其覺悟と信仰とは眞劍に道を聞き之を體驗し其處に自ら覺醒の第一門を打開かなければ絶対に不可能の  
事であります。唯だ御話を聞き或は思つて見た丈では結局其場限りになつて終ふ恨があります。如何に  
世界の文化が燦爛たる光輝を放つても、個人又は各人の間に於ける精神的缺乏があつては本當に喜びを  
喜び合ふ事は出来ません。宗教も唯だ徒らに一宗一派の形式的巢窩に踞躡しないで、御互ひの至當至純  
の生活が伸び行く様に眞の人間の宗教として此日常生活の指導原理として立たなければ結局幻滅をまぬ  
かれる者でありませぬ。此故に人間の意味から云へば求道とは眞の人生を求める事であり信仰とは生命  
の一大事を解決すると共に毀譽褒貶の八風に動搖せられずして強く生きて行く事であります。然し乍ら  
其處には是非共修養實行に依る體驗が必要とされるのであります。

茲に私共は人間生活の眞義を覺悟し御互に氣持よく長閑に眞人の價値生活を體驗す可く此五日間の人生

想が兎角悪化しやすく且又風教上面白からぬ影  
響を來しつゝ、あるのを慨嘆してゐる次第です。  
此中に當つて眞生同盟の信條を基礎としたる宗  
教的思索を頭に泌み込ませる事は眞に時宜に通  
じた事と存じてゐます。つきましては來る年頭  
に最も信頼する青年幾人かに眞生を贈つてお互  
が眞實の人生に處へ度いと存じます。

#### ●新に信仰座談會生る

左は其の案内状です。  
現代稀に見る宗教界の偉人、土屋御上人に依り  
まして吾々は少しも信仰に目覺めさせて頂い  
た事を喜ぶ者、ありまして此の信仰により自己  
を反省し一足々々と向上の道をたどり度いと念  
願してゐる次第でございます。

人として誰も人格の完成、價値の生活を望ま  
ぬ者は無いとありませう、人格の完成、價値の  
生活を期するには信仰を中心とするに非ざれば  
は當底得て望むべきで無いと信じます、吾々が  
信仰上の座談會を開いて皆さんの御集りをお願  
するも此の目的に向つて進まんとするするに  
外無いのであります、どうぞ一人でも多く(老  
若男女ヲ問ハズ)御訪ひして御來會下さる様御  
願ひいたします。

毎月十五日夜六時半より 關町十  
(約一時間念佛、終つて座談會) 場所 王堂  
大正十五年十二月一日

主唱者 中村利平、折藤松榮、箕輪嘉一

修養の集りを企てまして夫れ、御忙がしい事ではありませうが、過去空しく忙裏に二十年三十年を過ぎ來れる迹を振り返り見ますれば、尊き今後の生命を有効ならしむ可く此會を通じて人生の一大事を決着せしむる事は決して單なる五日間の問題では無からうかと存じます。

どうぞ御職務に御差支へのない晩から朝への時間でありますから暫く御家庭に眠る事を割愛して緊張と眞實とを味ひ以て將來永劫の範式として、頂きたいのであります。

通ふと云ふ事も悪くはありませんが、寢食起居を同ふして眞生共生の事實に此身を浸すと浸さないとは其効果に於て莫大な相違のあるものです。

願くば御近くとも思切つてお泊りを願ひたいと存じます。

昭和二年一月

主催 眞生同盟清水支部

(電話長三番 鈴木方)

- 一、會場 清水市清水實相寺(東海道江尻驛より市内廻り金十五錢)
- 二、時日 一月十一日午後四時より一月十六日午前七時迄
- 三、會費 實費金四圓(十一、十二、十三日は中食なし希望者は實費として一食金貳拾錢)
- 四、申込 一月七日迄鈴與方又實相寺へ
- 五、講師 土屋觀道先生

注意

市内在住の方は寢具御持參下さい  
遠方の方は實費

割 間 時

日 時	五時	五時半	七時	八時	十二時	一時	四時	四時半	五時半	六時半	十時
十一日(火)							集會	開會	夕食	講話又ハ娛樂	就床
十二日(水)	行事	講話	朝食	各自常務(常務無キモノハ念佛修養)			講話	同	同	講話又ハ娛樂質問	同
十三日(木)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十四日(金)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十五日(土)	同	同	同	講話	晝食	講	同	同	同	同	同
十六日(日)	同	同	同	閉會解散			同	同	同	感話質疑	同

觀道旅行日程

十一日 十六日 朝まで	清水實相寺	十九日 晝	神戸高商
十六日 夜	大阪豊田省三氏	廿、廿一日	名古屋崇徳寺
十七日 晝	大阪高商	廿二、三、四日	三重縣高宮
十七日 夜	大阪市民館	以後 未定	
十八日	尼ヶ崎圓平寺		

